

氏名	あおき しげゆき 青木 滋之
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第 272 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	ロックの観念説 ——自然主義の観点から——

論文調査委員 (主査) 教授 富田恭彦 教授 安井邦夫 教授 小川 侃 助教授 佐藤義之

論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は、ロックが行ったいわゆる「自然学的考察」に焦点を当て、それと深い関係にあるボイルの粒子哲学およびロック以前の物理論等を検討することを通して、ロックの観念説における経験論的性格を自然主義的視点から整合的に理解することを目指したものである。

本論文は八章からなる。各章の要旨は、次のとおりである。

第一章 バークリの挑戦

従来の教科書的記述では、ロックの言う一次性質は、物に内在するものであるのに対し、二次性質は、心の中にのみ存在するものとされた。そして、バークリが提出した議論（一次性質も二次性質も、ともに心の中の観念であり、また、二次性質を一次性質から区別するための相対性に訴える議論は、一次性質にもあてはまる）を是とする視点から、ロックの区別は「哲学的に時代遅れ」のものともなされてきた。

第二章 ロックを救う——自然学的考察を手掛かりに

しかし、ロックの一次性質・二次性質の二分法は、バークリが行ったような現象分析（観念分析）に関わるものではない。ロックの観念説は、ボイル的粒子仮説に基づき、観念と物体の区別を基本としている。そして、ロックが行った一次性質と二次性質の区別は、観念を生み出す物体の性質の区別であり、観念の生成原因を説明するためのものであった。それゆえ、バークリが行った一次性質と二次性質の区別を論駁する議論は、ロックの意図から外れていると言わざるをえない。

第三章 原子論の復興——ガリレオからパワーまで

ボイルとロックの性質理論の特徴を明らかにするためには、彼らが批判対象とした先行する自然哲学の諸理論を検討する必要がある。ペリパトス派の質料・形相説に対して、ガリレオ、ガッサンディ、チャールトン、デカルト、パワーら、粒子説ないし機械論に与した人々は、物体の性質は機械論的語彙によって表現されるべきであり、また、ペリパトス派が基本性質とした熱、冷、乾、湿は、一次性質ではなく、機械論的一次性質から派生する二次性質として捉えるべきものであると主張した。しかし、彼らの議論はアプリアリな性格が強く、実験哲学の方法論に整合的な理論とはなりえていない。

第四章 ボイル——ロックの粒子仮説

ロックの一次性質と二次性質の区別は、ボイルの一次性状と二次性質の区別を継承している。ボイルのこの区別は、粒子が他のものとの関係なしに持つと考えられる絶対的性質と、われわれの感官との関係において発現する相対的性質の区別である。ただし、ロックの区別は、ボイルの区別とまったく同じというわけではない。ボイルの場合、物と観念の区別が必ずしも鮮明でないのに対して、ロックの場合には、心の直接の対象である観念と、物体の性質とされるものが峻別され、ボイルの言う「二次性質」は、物の性質としての「二次性質」が心の中に引き起す「観念」として位置づけ直されている。また、ロックがボイルを継承したことからすれば、ロックの一次性質と二次性質の区別は、現象の分析に基づくというよりも、むしろ、ボイル流の粒子哲学が有する単純性や説明力に基づくものであることは、明らかである。

第五章 ロックのボイル批判——経験論からの再構成

ボイルは、ロックに影響を与えたにもかかわらず、いまだ自らの経験論的認識論を整備しておらず、また、粒子の記述に用いた語彙も、スコラの残滓に染まっていた。ロックの『人間知性論』は、王立協会の実験哲学を受容・拡張したものとしてみることができる。それは、ボイルの粒子哲学に内在する不必要なスコラの要素と概念的混乱を除去しながら、物体の一次性質と二次性質の区別を確立しようとする点で、王立協会の自然哲学者たちの仕事に寄与するものであった。ロックはスコラの語彙を廃するとともに、個別観察・個別経験を重視した自然誌的方法によって一次性質を規定することにより、ボイルのアプリオリ・独断的・天下りの一次性質の規定を廃して、それを実験哲学の方法論に整合的なものとした。

第六章 ロックの物そのもの——ヨルトン説の批判的検討

粒子仮説的な「物そのもの」の導入により、ロックの観念説は「心—観念—物そのもの」の三つの項からなる知覚表象説として特徴づけられる。これに対して、ヨルトンは、観念を対象ではなく作用として捉え、直接実在論的解釈を採る。しかし、ヨルトンが観察可能な日常的对象を表す言葉とみなした「物そのもの」が、ロックにおいて粒子仮説的な、観察不可能な物体を表現していたことは明らかであり、したがって、ロックが知覚表象説を採っていたことは疑えない。だが、これは、ロックの観念がヴェールであることを意味するものではない。問題は、いかにして観察された事象から観察できない事象への飛躍（トランスディクション）が行えるかである。

第七章 粒子の観察不可能性——顕微鏡観察のインパクト

パワーやフックの著作は、当時の顕微鏡観察の実際を示している。ロックは、こうした顕微鏡観察の影響を受け、これが彼の粒子の措定を支えるものの一つとなったと推定される。だが、ロックは顕微鏡による粒子の直接観察の可能性を認めず、むしろ、人間の原理的な認識能力の限界を説き、粒子の観察不可能性を示唆する。ロックの場合、外界の粒子は、類推によって措定される蓋然知の対象であり、結果から原因への推論によって、われわれの観察を超えたところに想定された対象である。

終章 ロックの自然主義とは何か

以上に示すロックの観念説の基本的性格は、基礎づけ主義的なプロジェクトの一環としてのロック理解と大きく齟齬する。蓋然的な類推的探求による粒子仮説に基づく自然学的考察に依拠した彼の観念説は、自然哲学との緩やかな連続性という性格を示している。ロックは、知識の基準を観察経験に求めることにより、新たな実験哲学に即応した探求の方法論を体系化するという仕方で、王立協会のプログラムを支えた。そしてまた、ボイルの粒子仮説を論理的に再構成することにより、経験論の視点から、当時の最先端の科学理論である粒子仮説を正当化しようとした。ロックが自らの仕事を偉大な科学者たちの「下働き」として位置づけたのは、まさしくこの意味においてであった。

論文審査の結果の要旨

従来、ロックは、基礎づけ主義的認識論を形成する上で、デカルトやカントと並んで重要な役割を果たした哲学者であると見られてきたが、近年、ロックの立場を、「科学の解明に科学を用いる」というクワイン的な意味での「自然主義」として、位置づけ直す動きがある。本学位申請論文は、そうした自然主義的ロック解釈に与し、歴史研究を通して彼の自然主義の具体的な在り方を明るにもたらそうとしたものである。『人間知性論』に見られるロックの見解のある部分をボイルの影響と見、それとの関連においてロックを読み直そうとする着想自体は、特に目新しいものではないが、ロックの観念説がいかなる意味で当時の自然科学との連続線上で営まれ、またいかなる意義をそれは担っていたかについての具体的調査は、とりわけ我が国では皆無に近い。本論文はこの困難な作業を取って試みたものであり、その点において、それが持つ意義は大きい。

申請者は、ロックによる一次性質と二次性質の区別がバークリのそれとずれているにもかかわらず、教科書的には、両者が混同され、ロックの区別がバークリ的な区別として紹介されていることに注意を向ける。そして、その区別に対するバークリの批判がロックに対して妥当すると一般には考えられ、ロックの区別は時代遅れであるとみなされていることを指摘する（第一章）。こうした現状に対して、申請者は、バークリが行ったことを「現象分析」と捉えた上で、ロックの区別が観念の原因である物の性質に関する分析に基づくものであったことを示し、それゆえ、バークリの批判がロックには妥当しな

いとす(第二章)。

こうした準備段階を経て、先行する自然哲学とロックの知見との関係についての考察が、続く三つの章で行われる。申請者は、まず、ボイルとロックの性質理論の特徴を明らかにするため、第三章で、ペリパトス派の質料・形相説、ガリレオ、ガッサンディ、チャールトン、デカルト、パワーらの、粒子説ないし機械論を取り上げ、それらの見解の基本を確認する。そして、粒子説もしくは機械論に与した人々が、物体の性質は機械論的な語彙によって表現されるべきだとし、また、ペリパトス派が基本性質とした熱、冷、乾、湿については、それらを、一次性質ではなく、機械論的一次性質から派生するものとして捉えるべきであると主張したことを明らかにする。

だが、ボイル以前の粒子説ないし機械論に与する人々のそうした動向にもかかわらず、彼らの議論ははまだアプリアリな性格が強く、実験哲学に整合的な理論を構築するには至っていないと申請者は見る。この点を明らかにするため、第四章では、ボイルとロックの粒子説を具体的に検討する。その結果、申請者は、ロックの一次性質と二次性質の区別は、一次性状と二次性質というボイルの区別を継承しているとしつつも、ボイルとロックとの間には明確な差異があるとする。すなわち、ボイルの場合には、物と観念の区別が必ずしも鮮明ではないのに対して、ロックの場合には、心の直接の対象である観念と、物体の性質とみなされるものが峻別され、ボイルの言う「二次性質」は、物の性質としての二次性質によって引き起こされる「観念」として位置づけ直されている。そして、ロックがボイルを継承したというこのことから、申請者は、はじめの二章の問題に戻って、ロックの一次性質と二次性質の区別は、現象の分析に基づくというよりも、むしろ、ボイル流の粒子哲学が有する単純性や説明力に基づくものであることを、確認しようとする。

だが、このように、ボイルは、ロックに影響を与えたにもかかわらず、いまだ自らの経験論的認識論を整備しておらず、また、粒子の記述に用いた語彙も、スコラの残滓に染まっていたと、申請者は見る(第五章)。これに対して、申請者は、ロックはボイルの粒子哲学に内在する不必要なスコラの要素と概念的混乱を除去しながら、物体の一次性質と二次性質の区別を確立しようとしたとする。この点において、ロックの『人間知性論』は、王立協会の実験哲学を受容・拡張したものととして読むことができ、王立協会の自然哲学者たちの仕事に寄与するものであったと申請者は結論する。

以上三章における申請者の歴史的分析は、ロックの一次性質・二次性質の区別の歴史的背景を具体的に分析したものであり、この点に、本論文の最大の意義が認められる。

だが、申請者の研究は、これにとどまるものではない。ロックが粒子仮説的立場から、観念のいわば向こう側に観察不可能な「物そのもの」を導入したとすれば、それが、経験論の立場からどのように理解されるべきかが問題となる。申請者は、第六章と第七章でこの問題を取り上げ、第六章では、ヨルトンの直接实在論的ロック理解に対して、ロックの言う「物そのもの」が、ヨルトンの言う日常的対象ではなく、粒子仮説的物体であることを示した上で、ロックにとっての真の問題は、いかにして観察された事象から観察できない事象への飛躍(トランスディクション)が行えるかにあるとする。

そして、続く第七章では、当時の顕微鏡観察を取り上げ、この問題をさらに考究しようとする。ロックはパワーやフックの顕微鏡観察の影響を受け、これが彼の粒子の措定を支えるものの一つとなったと推定される。だが、ロックは顕微鏡による粒子の直接観察の可能性を認めず、むしろ、人間の原理的な認識能力の限界を説き、粒子の観察不可能性を示唆する。申請者は、ロックの場合、外界の粒子は、類推によって措定される蓋然知の対象であり、結果から原因への推論によって措定されるところの、われわれの観察を超えた彼方に想定された対象であると見、それによって、経験と経験されざるものとの関係を、取り押さえようとする。

こうして、本論文は、ロックが先行する自然哲学者の何を継承し、何を改めたかを、特に粒子説(および顕微鏡観察)について具体的に検証しようとしたものであり、この点において、本論文はとりわけ意義を有している。そして、この考察を通して、ロックの観念説が、基礎づけ主義的なプロジェクトではなく、蓋然的な類推的探求による粒子仮説に基づく自然科学的考察に依拠したものであって、自然哲学との緩やかな連続性という特徴を持つ「自然主義」的立場からの営みであったことを、再確認している。

本学位申請論文は、これまで我が国ではほとんど試みられなかったロックの自然主義を具体的に検証しようとするものである。その内容には、申請者の一箇年に亙るイギリス留学の成果が盛り込まれており、その意味でも、本論文は、この分野の研究に寄与するものと確信される。また、本論文は、その内容から見て、人間・環境学研究科(人間・環境学専攻、人間

形成論講座)の基本理念に合致するものと判定しうる。

よって本論文は、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。